
我ら地を駆り海を渡り空を飛ぶ

冬樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我ら地を駆り海を渡り空を飛ぶ

【Nコード】

N9838K

【作者名】

冬樹ヒロ

【あらすじ】

地球最大の大陸を失い、無期限の消耗防衛戦争となった人類。そして自由主義国家群と共産主義国家群との対立。ユーラシア大陸で跋扈している二大勢力が敵対。人類の天敵。様変わりした人類圏で新たに発足した白燕財閥は50年ものときで人類の奥底まで根付いた。

そして50年もの間、侵攻されたことのない日本。遠征派遣は幾度もおこなった日本人は自らが侵略される恐怖を知らなかった。そして遂に日本にも敵の侵攻が始まる。

そのとき、米国から一人の少年が新兵器と共に来日する。

皇軍、青森防衛へ神軍到来へ

病。古くからありとあらゆる病気が、人類の有史以来密接に関わりを持つてきた。その中には繁栄を遂げた国を簡単に崩壊させた病もあつた。時には科学では説明のつかない病もあつた。この病も何を発祥に起こつたのか不明であり、治療法も発見されなかつた。ただ、その病は加速度的に広がりわずか一日で大都市の住民が死に至つた。やがて、彼らが有史以来積み上げ、確立していった秩序は崩壊していき、無秩序と化した世界は争いが支配した。そして世界の人々が自らの終りを覚悟したとき、希望が舞い降りた。突如として世界のあるあちこちに出現した黒い穴は人々に語りかけた。自らの運命を変え、生き永らえたければ祈れ。強く強く強く、ただ祈れ。さすれば汝らにあらたな楽園が与えられん。

人々はその語りに耳を傾け、やがて世界のあるあちこちで人々が生物が精霊が黒い穴に吸い込まれていった。

ある世界では争いが絶えず、土地は焦土とかし街はインフラがスツトプし、物流もとまり人々の心は荒んでいた。人々はやがて自らの脆弱な体を罵り、遺伝子に手を加えるようになった。それは時が進むにつれ、人の容をせず醜く禍々しい容姿となった。しかし、それは強靱な肉体を供えるのと同時に知能の低下に伴つた。やがて人々は知能を保ち肉体的にも強靱な支配種に支配されるようになり、互いの縄張りを巡り争いをし始めた。そんな人々にも黒い穴は語り、彼らを導いた。

そして地球に似て似つかぬ地球。この日、本来なら第二次世界大戦の発端となるポーランド侵攻が行われるはずだった。しかし、地球はこの日を境に異世界人が争う戦場と化した。

ベルリンに現れた黒い穴。そこからはまるで天使のような容姿を

した美しき者たちが出現。彼らはヨーロッパを殺戮の嵐で埋め尽くした。そして彼らは中東にも勢力を広げる。

シベリアに現れた黒い穴。そこからは地獄からでてきたような化物が、その醜い容姿に違わぬ行動に出る。そして彼らはアジアにも足を伸ばす。

人類はこの天敵の出現に手を取り合い、対抗した。しかし、悲しい事にこのような事態に陥っても完全に人類は手を取り合えなかった。ドイツの技術は資本主義と共産主義の両方に流れ込み、人類はこの二大党によって分割された。そして人類は別々に天敵に対抗することになった。

大日本帝国。当初はどちらに組することもなく、独自路線をいていた国だが両陣営からの資源の供給のなかった国は次第に衰えていく。これを危険視した当時の新米派の重鎮によって改革が行われ、日本は英国を見本にした民主主義に移行していく。これにはいろいろと問題はあったが、時間をかけ改革は行われアメリカからの技術・資源を得た日本は来る天敵との決戦に備えた。

そして20年、ヨーロッパは英国本土を残し人類は全滅。

ヨーロッパを支配した天敵は『神の軍勢』として畏怖されていた。彼らはその矛先を東に向けた。そこにはソ連と死闘をひろげていた『悪魔の軍勢』がいた。

10年。その間は『神の軍勢』と『悪魔の軍勢』の戦争となった。その間に人類は軍備増強を行い、ユーラシア大陸の防衛線と要塞化に専念。日本は米国の駐屯基地を整備・合同訓練し、遠征軍を組織し反抗作戦のための部隊をユーラシアに送り込んだ。

そして1970年。英国を中継地点に上陸作戦を開始。それに呼応するようにソ連・中国（共産党）と日本・米国（資本主義）の合同軍が境界線を越え、進撃を開始。

しかし、人類の反攻は尽く阻止され部隊は各個撃破された。上陸

した部隊は海に蹴落とされ、合同軍は重慶の最終防衛線までの後退を余儀なくされた。

1989年。重慶防衛線も突破され、合同軍は台湾・朝鮮半島から日本に脱出した。ここにユーラシア大陸から人類は全滅した。

人類に残された地は、南北アメリカ・中南アフリカ・台湾・英国本土そして日本。

ユーラシア大陸では未だに天敵同士が争い、そして人類の残された地への侵攻を画策していた。

1991年。

この日、めつきり減った米国からの定期連絡船に一人の少年がいた。彼の名は白燕進^{はくえんすすむ}。白燕と聞けば、今や畏怖の対象とされている財閥である。世界的な財閥で、今や小さい物はボールペンから大きい物は空母までありとあらゆる物を取り扱う財閥である。また白燕の約9割は元々関係のない人たちが構成されている。才能があり、白燕の掲げる思想に同調する人はいずれ白燕を名乗る事となる。彼は生まれて直ぐに白燕の名を名乗る事となった。

生まれた彼は直ぐに白燕の秘密研究機関に預けられ、そこで実験体として彼は十数年過ごした。しかし、ある時彼の担当となったのは20歳の若い女性だった。彼女は科学者としては珍しく情人家であり、彼の境遇に同情した彼女は、昔撮った写真や外の世界の事を話した。やがて彼は外の世界に興味を持った。そしてある日、彼女は施設内の職員が寝静まったのを見計らい彼を逃がそうとした。施設をでた彼女は彼にパスポートとお金を渡すとある人の名前を告げる。すると彼女は施設に引き返した。そして彼は彼女に後ろ髪を引かれながらも、外の世界に一步を踏み出した。彼女がその後どうなったのかは知らない。ただ、自分を逃がした事で彼女が無事でいられるわけがないことはわかっていた。

……しかし白燕財閥の情報網はすでにCIAすら陵駕していた。そのため彼の脱走は脱走でなく一部始終監視されていた。しかも生

まれてからずっと閉鎖された研究所で過ごした彼には、例え大金があってもその使い方がわからない彼は数日後には、白燕財閥の組織に保護された。そして保護と言う名の監視の元、彼はしばらく普通の生活を体験した。そして17歳となった彼は日本に渡ることになった。

「ここが日本か」

彼の前には近代的な高層ビルがいくつも見えた。米国で聞いていた日本とは印象が違った。日本では木造建築が主で鉄骨製の建物は少ないと言われていたが、現実には米国に劣るとも劣らないほどの大都市だ。船から降りた彼に黒服の男が近づいてきた。

「白燕進様ですね。お出迎えにあがりました」

白燕と聞いた周りの視線が自然と進に集まった。進は気付いた風もなく、慣れた足取りで高級車に乗り込んだ。高級車は直ぐに発進すると白燕財閥のビルにむかった。着いたビルは見上げても頂上が見えなかった。68階建の高層ビルの最上階に白燕財閥の主だったメンバーが集っていた。そこに案内された進は凹型の会議用のテーブルの右端の椅子に腰を降ろした。進が座つたのを確認した代表の一人が会議の開始を告げた。参加しているのは左に文官、右に武官そして、真ん中に会議進行委員がいた。

「諸兄も知つての通り、本日早朝に監視衛星がユーラシア大陸から『神の軍勢』の大群が日本海を渡っていることが確認された。既に自衛軍は九州に大量に配備していた部隊を青森に送り込んでいる」

「…青森にはどれだけの部隊が展開しているのだね」

「青森第8師団の一部に東北学兵旅団、海岸警備隊、後は青函トンネル守備隊と憲兵隊ぐらいですね」

「ろくな部隊がないな」

「既に第2師団の一個連隊と第3戦車師団の一個大体が先発しています」

「しかし、やってきたのが『神』の側とわな」

武官の一人が溜息交じりに呟いた。

ユーラシア大陸の西半分が『神』で東半分が『悪魔』が支配圏だと考えられていた。何故なら戦闘地域以外では監視衛星にもその姿が映らないのである。大都市には一年中濃い霧に囲まれていてあらゆる手段を用いてもその内部を調べる事はできなかった。その為、ユーラシア大陸の極東に位置する日本にやってくるのは『悪魔の軍勢』と考えるのは至って普通の事であった。

「嘆いても状況は変わりません。勝手に思い込んでいたのはこちらで、あちらさんには関係のないことですから」

海軍海兵隊第2旅団の司令官となつている白燕善次郎大佐だ。重慶防衛線では部隊の3割の被害を出しつつも、防衛の一角を支えたとして名將の一人に数えられていた。ただ、その折に小型の悪魔の浸透を許し、非戦闘員にかなりの被害をだしてしまったことに罪悪感を覚えていた。

「くくく、当然だ。奴らには奴らの都合でな、こちらの都合ではな。だが、問題はその先発している部隊が到着するまで、戦線を持ちこたえられるかな。くくく、無理だろうな」

不気味な含み笑いで答えたのは、白燕忠則中将だ。白燕一族でも希少な変わり者でもちろん嫌われていたが、優秀であり白燕の名を名乗りには十分であった。

「だからといって、何もせんわけにはいかんだろ」

「それよりも市民の避難を第一にしてみたい。学兵に関してもできれば二線級の戦線か、後方支援などにもしてみたい」

発言したのは文官で文部省に勤めている白燕だ。

「市民の誘導は勿論だが、学兵に関しては自衛軍が到着するまでは主力にせざるをえんな。でなければ、防衛線の構築どころか、市民を安全な場所まで誘導もできん」

「その誘導ですが、避難はどれほど？」

善次郎が最近度を入れ替えた眼鏡を直しながら、尋ねた。

「既に青函トンネルから北海道のルートと弘前駅からの鉄道をピ

ストン運動で避難させている」

「防衛線の構築に必要な部隊が揃うまでにどれだけかかる？」

「二日、いや・・・三日だな。だがこれも防衛でわな。くくく、しかも学兵を全面に押し立ててのな。くくく、今いる学兵旅団は全滅必須だな。しかも待機状態にある学兵も招集しなければ間に合わないときている。ふははは、おもしろい実に愉快だ。今度の戦争の勝敗の鍵を学兵に委ねねばならんとわな」

忠則が腹を抱えて、不規則な笑いをたたえるのを武官などは睨みつけ、文官などはその被害と保護者からの苦情を考え、今から頭を抱えていた。

「そこで俺というわけだ」

忠則の笑いを遮る形で発言したのはこの中では新参者になる進だった。古参の忠則の発言（笑いだが）を遮るのはよっほど度胸がなければできないことであつた。

「誰だ、貴兄は？」

「白燕進。さつき米国から渡ってきたばかりだ」

「なぜ貴兄がいるの？」

「日米が共同で開発した汎用兵器部隊を俺が指揮している。これは既にテストも終り、一個小隊で敵の大隊規模に相当するとされている。自衛軍ならその機動打撃力は一個旅団以上になるぞ」

進の発言に一部を除いて驚いた。

「そんな話、聞いたことがない」

出席者の一人が他のメンバーの心を代弁するかたちで質問した。

「当たり前だ、これは白燕財閥でも最高機密事項にあたることだ。今、外部に知れ渡るわけにはいかなかった」

「だとしても、なぜ貴兄のような若造がその事項を知っている？メンバーの中でも最も古いメンバーの一人が青筋をたてている。

「うるさいよ、爺。別に俺も直接関与しているわけじゃない。さつきも言つたら？俺は米国の白燕研究施設で操縦の訓練を幼いころから受けていたんだ。そしてその部隊をただ指揮するだけだ」

進の言っていることに間違いはない。ただ、彼自身も操縦の訓練を受けていた事実を知らなかったのである。これには特殊な操縦方法にわけがある。

「・・・だからと」

「その辺にしておいたらどうじゃ」

今まで黙って会議の成り行きを見ていた一人が口を開いた。白燕はくえん勝人んかつと、白燕財閥当主代理としてこの会議の進行を任されている。

「今話すべきは青森に上陸する敵にどのように対応するかであろう？」

勝人は会場を一睨みすると各自に指示をだした。

会議が終わり、進が部屋を出ると声をかけられた。振り向くと善次郎と忠則がいた。

「なに？」

「くくく、反抗的な目だ。そう恐れずともよいだろ？」

「恐れ？」

「閣下戯れがすぎます。いや、君の部隊だが臨時に私の指揮下に入る事になっている、それで横須賀軍港で大型揚陸艦『そらなみ』に乗艦してもらいます」

「了承した」

進はそれだけ言うと二人に背をむけ歩き出した。

「大変なお荷物を背負うことになったな」

忠則がおもしろそうに善次郎を冷やかす。

「仕方ありません。ただ、私は別にあの子のお荷物だとは思いませんがね」

忠則は善次郎をしげしげと見つめる。

「物好きな奴だ、貴兄は」

忠則は善次郎の肩を叩いてさっさと去っていた。

善次郎は忠則の背中を見送ってから自分も旅団本部にむかった。

皇軍、青森防衛へ神軍到来²

横須賀海軍基地／第二軍港

大型揚陸艦『そらなみ』。本来は大陸反攻作戦に参加する部隊を送り届けるために建造された艦だが、重慶防衛線が突破され大陸から人類が全滅したことで出番がないままとなった。

本来なら今回の防衛線には使えないのだが、日米が共同開発した汎用兵器。俗にロボットと言われるものだ。制式には人型汎用兵器又は二足型機動兵器。名称『タケミノカヅチ』全長約20m、全幅5m総重量は20t。その特性には戦車ではできない脅威的な踏破性と多様な攻撃オプションである。その代わり、一機での攻撃力はさほど高くなく、数機で一隊を組まなければならない。そして一番やっかいなのがその特異な機体のせいで生産と整備が、その他の兵器に比べ困難であった。

この機体を運ぶのに適した輸送機が少なく、全機を一度に運べないからである。

その『そらなみ』には人型兵器と人員、補給物資や整備車両などが積み込まれていた。他にも大型一隻、小型三隻、特殊型二隻が停泊していた。そちらには海兵旅団が乗り込む予定だ。

横須賀の海兵第二旅団本部ビルの最上階に位置する会議室に主なメンバーが集まっていた。軍港を一望できるこの部屋で、輸送艦の艦長と副長、主な部隊長と副長が一同に顔を揃えている。並べられているパイプ椅子に座り正面を見据えている。正面には旅団長と参謀長そして白燕進が肩を並べていた。旅団長の善次郎は全員が揃ったのを確認するとホワイトボードの前に立ち、指揮棒である一角をさした。そこには青森の地図が貼り付けてある。

「我々海兵第二旅団は横須賀から特別遠征打撃艦隊の輸送船で八戸港^{のへ}に上陸します。その後、部隊は八戸駅から装甲輸送列車^{はち}に乗り

東北本線で弘前駅へと向かい、そこで部隊を展開させます。既に配った資料は見たと思いますが、そこが最前線であり今のところ唯一の防衛戦です。展開している部隊も正規部隊は殆どいません。幸い、敵の上陸が本格的でないのが救いですね」

善次郎が自分の席に戻ると換わるように参謀長が前に出た。

「今回の敵は主にヨーロッパ戦線で出現した俗に『神の軍勢』である。この中には米軍の海兵隊と共に戦った者もいると思うが、残念な事に我が皇軍に関していえば戦闘経験は皆無である。対応策や注意点に関しては国連を介して既に全軍に伝わっているが、実戦は訓練とは違うのと同じである。現場では学兵が未熟ながらも皇臣民を守護すべく乾坤一擲の精神で奮闘している。しかし、装備でもろくに与えられていない学兵は、その命を散らしている。今の防衛線もそのような状況下のため一刻も早く正規部隊がいかねばならない。だが、九州防衛に気をとられた上層部の失態で正規部隊の殆どが九州・中国方面に配備したため、今すぐ向かえる部隊が皆無に等しい。そんな中、我々海兵第二旅団は全力投入が可能な状態である」

海兵第二旅団の参謀長は旧軍の影響を濃く受けていて、毎回演説を行うことが通過となっている。その為、海兵の兵は慣れたもので寝息をたてているものもある。善次郎の目配せを受けた個人副官が参謀長に駆け寄る。参謀長は「コホン」と咳をたて、仕切り直す。

「いささか、脱線したが。先ほど旅団長からもあったように八戸に上陸、装甲列車で弘前へと向かいそこで現地の部隊と合流し防衛線の強化に努める。また、今回の作戦に我々の部隊に加わった人型兵器部隊『タケミノカツチ』には現地に着き次第、第三中隊と共に偵察任務に出してもらう。また、この部隊は新設されたばかりで、今回の出撃には試験も含まれている。上からの要望で無理はしないように」

参謀長の新設の言葉に士官の中から「新米か」と言った愚痴が聞こえたが、進はあえて無視した。多分、第三中隊の士官たる。

青森防衛へ神軍到来3

海兵旅団本部ビルを後にした白燕進は、大型輸送艦『そらなみ』に乗艦した。自分の荷物を個室に運んだ。士官の進には個室が与えられる。簡素な備え付けのベッドに机と小型のパソコンがある。荷物を脇に置き、パソコンを起動させる。胸ポケットから記憶媒体をパソコンに接続する。画面に設計図が表示される。

『タケミノカッチ』

全長20m

全幅5m

重量20t

日米共同開発としているが、実際は白燕財閥が一手に研究・開発・製造をしている。ただ、開発所が米国の敷地で人員は日本人が多かった為と、国民に対しての安心感と国としての面子フェイスを保つ為に要請があったために、日米開発が表上は制式となった。

しかし、高性能なのを引き換えに生産コストと整備上の難しさがネックとなり、未だ両国とも制式化への目処はない。しかし、白燕財閥はこれ以外にも歩兵の生存率を高めるための『アーモースーツAS』の開発に着手しており、既に試作は完成している。他にも色々あるが、白燕はその実態自体が不確かなものだから何があっても大抵の人は納得してしまう。

進がクリックする度に画面が変わる。その度に試験中の機体や兵器などの詳細なデータが表示される。しばらく見つめていた進だが、艦長に挨拶をし忘れてたのに気付कि慌てて艦橋に駆け上った。その時、進はデータを抜くのを忘れていた。

「艦長、白燕大尉です」

「失礼します。挨拶が遅れました。陸上自衛軍一（陸皇軍）特別

試験評価実施部隊主任代理の白燕進大尉であります」

進が敬礼をする。皇軍の敬礼にはいくつか有り、陸は右手を右眉毛の端に爪先が触れるように。海は右手を斜めに自分の左肩に付ける。空は右手を自分の心臓付近に拳を付ける。などの事例がある。進は陸の所属待遇になつてゐるために陸式の敬礼となつてゐる。

白の一等航海服を着た老練の男性が進に敬礼しながら自己紹介する。

「我が『そらなみ』にようこそ。白燕大尉。わしがこの艦を預かる荒波海軍少佐だ」

そう言つて、はにかんだ笑顔は場を和ませるには十分だった。白髪を短く揃え、白髭を蓄えた老練な艦長は進に席を勧めると、その巨体を椅子に沈み込ませた。

「ふう〜、いやこの老いた体にはちよつとした航海も体には染みるからの。白燕と聞いたからどんな陰湿な奴かと思つたが、いやいや随分とかわいい少年だ」

進は出されたコーヒーを口に一口含んで、艦内を見渡した。他には数人がいるだけで閑散としていた。進が座つてゐるのは本来なら副長かもしくは乗艦した将官用の椅子だろ。

「ふふふ、驚くのも無理はないが。この艦は最新鋭の艦なのだが、何せ本来の目的が無期延期状態となつてしまつたのでな。当初装備されていた機器が大半持つていかれてな、人も」

目的とは大陸の反攻作戦のことだろ。確かにそう言われれば、広い割には機器類が少ないわけだ。人員も高齢が多そうだ。その分、ベテランが多いとも言えるが。

「ベテランは多いよ。ただ、大半が古い艦に配属だったものばかりでな。ハイテク機器には弱くて、あちこちから集められた者ばかりじゃよ。かく言つわしもじゃけどな」

荒波が苦笑しながら緑茶を啜る。

「前はどの艦に？」

「長い間、予備役でな。恥ずかしい話だが、当時の参謀長にムカ

ついて殴ってしまつてな。艦は駆逐艦『雪風』じゃよ」

駆逐艦『雪風』。天敵との防衛線が始まり、主は陸であったがそれでも水中型の敵との戦闘は世界のあちこちで潜在していた。海軍の艦艇がヨーロッパ戦線に派遣されるときも従事し、十五体の敵を撃破し、しかもほとんど無傷であった。また、往復の航路でも数少ない無傷の艦であり《幸福艦》と呼ばれている。

青森防衛と神軍到来と（後書き）

感想求めます

作中に『自衛軍』と『皇軍』とありますが、前者が正式な軍隊名で後者は昔の名残で特に士官で呼ばれます。『皇軍』はすべての軍（陸海空）を合わせて言っています。

皇軍、青森防衛へ神軍到来4

艦長と一通り挨拶と雑談をした進は、自室に戻った。そこで初めて記憶媒体を抜き忘れていたことに気付いた。誰かが触れた形跡はなかったが、進の不安は拭えなかった。

警笛が鳴り、船の出港を告げた。

青森弘前市防衛線

国道7号線沿いに長く薄く造られた防衛線にまだ年端もいかない少年少女兵が、数少ない正規兵に率いられ《神軍》相手に苦戦を強いられていた。7号線の両側は弘前市と山がある為被害はあまりではないが、中央の部隊は凄惨であった。前方に津軽平野、後方を青森平野に挟まれ隠れる場所が皆無であった。塹壕をや蛸壺を掘り、巧みに偽装して四方から敵をかく乱しながら戦うしかなかった。

ここで《神軍》について現在までで判明していることを説明しておきたい。

- 1・神軍は悪軍と違い、飛行タイプが多く確認されている。
- 2・また、固体固体の大きさが非常に大きく遠めに見て取れる。
- 3・しかし、個体数は決して多くない。
- 4・ただ、物理防御をなすバリアーのようなものを備えている。
- 5・敵の多くは球体を発生させる。それを喰らった兵士は消滅する。
- 6・また、精神攻撃が見られるが詳細は不明。
- 7・姿形は人間によく似ており、神話に登場する神々を連想させる。
- 8・隊長クラスは金色、一般クラスが銀色となっている。
- 9・戦術においては金色を中心に鶴翼陣形をとる事が多い。

これが主に世界で認識されている9条項であった。

そのため、兵士たちは正面からの殴り合いはせず地道に隠れ死角からの攻撃がもつばらである。また、元々は東南アジアの密林地帯での戦闘を想定していた軍を過去に持つだけに擬装はこの時代でもトップクラスであった。重慶防衛線などでは大いに活躍していた。また、本土決戦においては山が多く起伏が激しいのを利用し、山をくり抜いて造られた地下基地や稜線陣地が数多く存在し、日本各地で長期的なゲリラ戦が可能とされている。この青山も北の仮想敵大国の元ソ連を想定した大規模な陣地が造られている。しかし、元々平地の少ない日本において野戦の戦車決戦などは想定されておらず平野などは全て無視されていた。平野を敵に与え、敵をそこに集中させ四方に連なる山にある陣地からの攻撃で漸撃するのが主旨であった。そのため、開けた場所での戦闘になれていない日本だけに苦戦は免れない。ただ、国民性の我慢強さがここに現れていた。

『こちら、弘前最終防衛線司令部である。本日の午後3時をもって市民の疎開完了とする。よって午後3時より自衛軍の主力が到達するまで我が部隊はゲリラ戦に移行する。各車両はコンクリート製の建物に隠蔽。自走砲並びに長距離多弾頭噴進弾部隊は後方に退去ののち、展開、こちらの合図をもって弘前市に対しての絨緞砲撃を開始する。各隊長はプランを確認の後、午後3時までに所定の配置につくように。なお、主力の到達は明日の明朝とされている。以上、弘前最終防衛線司令代理』

先をいき過ぎたが、この時点で青森防衛戦は既に二日目に突入している。すでに全戦線は膠着状態にあった。本来なら既にこの防衛線は突破されているのだが、それは人間相手の戦争である。さきの記述にはなかつたが、『神軍』には敵をある程度のレベルで感知できる固体がいる。これは生物が放つ生命電気信号を固体で感知するのである。鮫のよう物だとおもっていただければ幸いである。しかし、位置を判明するまでには至らないため、後は他の個体が見つけないで殲滅するまで続く。そのため、空を飛ぶ割には進軍速度は極端

に遅い。

防衛戦司令部からの伝達を聞いていた学兵旅団第二大隊第一中隊長はすぐさま陸軍から派遣されている陸曹を呼んだ。

「佐藤陸曹長、司令部からプランに従い、所定の位置に展開とのことだ。20分以内に準備を終え、所定の位置に展開する。携行型のミサイルは残っているか？」

「先ほど、最後の補給がかなり数の数があります。迫撃砲を改良したものもありますので」

「では重火器のみを携行していこう。負傷兵は装甲車並びにトラックと共にここに置いていきます。一個分隊を警護に」

「了解」

「陸曹長。これから我々はハリネズミだ。一本のハリを触れば何本ものハリに刺される。今からは他隊との連携が大切です。学兵には忍耐がないのでローテーションを忘れずに。こんな状況ですから完全に回復する事はできませんが」

「隊長殿はよく考えてらっしゃる」

「元は教育者でね。何を間違つてか徴集されてね。今じゃ学兵を率いている」

「因果なものですな」

陸曹長はそういい、去っていった。

残された元教育者の佐渡大尉は最近吸い始めたタバコを啜え、火をつけた。慣れない煙にむせた。涙ぐみながらも吸い続けた。

司令部から通達を受けた各部隊は中隊規模ごとに所定のポイントに移動した。移動にはもっぱら地下水路が利用された。中には下水道を使う部隊もいた。地上を歩けない為、地下に潜り多少時間が掛かってでもこれで移動することが厳命されていた。これを無視して地上を行軍した部隊は殆どが壊滅した。

司令部は市役所の地下に造られていた防空壕に司令部を置いてい

た。司令部には最新型のノートパソコンが大量のケーブルで繋がれている。この防空壕は三段階方式で一番下に司令部、真ん中は医療施設などで一番上は弾薬や日常生活品が溢れている。この青森防衛の中核を成している第9師団。しかし、主力の部隊は熊本戦線に駐屯していてここは留守部隊が少数いただけだ。司令代理を務めている渡辺准将は壁に据え付けられたスクリーンに目を移していた。そこには青森の地図に部隊の詳細な情報が一寸ごとに映し出されていた。

「部隊の展開は予定時間内には終わります。砲撃隊による攻撃は定時通りに」

「ごくりっ」

報告をした部下を労い准将はスクリーンの一点を見つめた。そこには

皇軍、青森防衛へ神軍到来5

1991/06/08 AM 10:12

八戸港上陸

予定より12分遅れて海兵隊第二旅団を含む特別遠征打撃艦隊は着いた。直に海旅二は鉄道に乗り越えた。海二旅を降ろした特遠艦隊は青森湾に突入し、攻撃機とヘリを展開しつつ青森の防衛にあたる。これは後続でやってくる部隊の上陸地点を確保するものであり、艦隊のSSM-ハープン改（艦対特殊ミサイル）で射程範囲外距離からの打撃を期待してのものでもある。

荷物を鉄道に移すのには時間が掛かるため、進は再び艦長の元を訪れていた。今回は善次郎も同伴していた。艦長室で黒茶を飲みながら今後の方針を確認していた。海兵第二の兵器・物資は鉄道で運べるが、『タケミノツチ』に関してはその巨大さから運搬に支障が出るため青森駅で再度回収することになっている。その打ち合わせでもあった。

「客さんの荷物は後30分で終るだろう。問題の機体に関しては青森で良いのじゃな？」

荒波少佐が黒茶の苦味を味わいながら進に聞いた。まるで孫と話すおじいちゃんだなと善次郎は思った。

「はい。そのとおりでお願いします。少佐」

（ふむ。このやんちゃな坊やもこの老練な少佐には頭があらぬいか。理由は皆目検討がつかないが、中々おもしろい図だな。）

善次郎は忠則の癖が移ったかなと自嘲した。

「しかし、荒波海軍少佐。青森湾ではお気をつけください」

「わかっておるよ。いくら予備役が多いとはいえこのご老体も数々の戦場を渡り歩いている。色んな景色を見たよ」

荒波の言葉にどこか哀愁を感じた善次郎はただ頭を軽く下げた。

この少佐には自分の心配など必要のないことを悟ったからである。

「でも、本当に気を付けてください。これ以上人が死ぬのは」

進はそこで言葉をきり、黒茶を流し込んだ。甘党の進には苦かったが我慢した。

善次郎と荒波はそれぞれの思惑を含んだ目で進を見た。

「心配は無用じゃな。太平洋は未だに人類側の勢力圏内。危ないのは青森湾の中だけじゃな」

「そうですね。青森湾の中では動きづらいですからね」

「ふふ、しかし心配されるのは嬉しいものだ」

荒波は昔に妻と娘を亡くしていた。いつも出勤前に娘と妻に送り出されていたのを思い出したからだ。

善次郎には縁のない話だが、人前ぐらいの感覚は持ち合わせていたからそうですね、と相槌をうった。

「では、そろそろ」

そういつて、善次郎と進は退出した。それを荒波は優しい笑みで送り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9838k/>

我ら地を駆り海を渡り空を飛ぶ

2010年11月18日11時34分発行